



冬の甲佐路を駆ける（熊本甲佐10マイル公認ロードレース大会）

うたごよみ 睦月

「短歌」

米納三雄選

ひそと咲く庭木の下の石落は小春日に照り黄
金色なす 上村 かず
冬の日になりしと重ね着する夫は空を仰ぎて
天気遣う 吉永由紀子
定規をば当てたるごとく一直に飛行機雲は青
空を切る 上村やす美
朝に来て縁で一時を過ぎしゆく馴れし野良猫
愛し野良猫 内山タミエ
晩秋に収穫終えし「銀不老」いつ食卓の主役
になるや 緒方 明美
窓辺にはポインセチアとシクラメン小花も東
ねグラスに生ける 赤星 延子
涙するほどにあらねどほろほろと思ひ出紡ぐ
秋の夜の酒 塚原 暁益
晩秋の山の紅葉を眺めつつ山の出で湯に浸る
楽しさ 本田富美子
外に出でて空を仰ぎしたまゆらを流れ星見て
心は躍る 松本ぬい子
疎遠詫び友への便は紅葉する一葉入れたり古
里は秋 森田 房恵
子猫らは吾が顔見では逃げて行く猫が嫌いと
分かるのかしら 内田乃武子
何時となく物忘れ多くなりし吾に「年古りた
り」とひとり思へり 井上ユリ子
風邪に負け寒さに負けて夜に独り熱燗酌めば
酒にも負ける 渡辺 幸士

「川柳」

「腰」

幼な児の振る腰踊り湧く拍手 成松 松枝
草取りの腰の痛みが身にしみる 道上キヌ子
腰痛で嫁の手を取る暇も取る 伊豆野ヤエ
足腰をなだめ掃除機かけをする 布田 愛子
足腰の話題がはずむ待合室 内村 邦炎
腰痛と共に年越しそばを食う 林 雅之

「師走」

貸し借りも無い人生の年の暮れ 丸岡はる子
病む友に迷う賀状の「おめでどう」 北 仁子
師走です不況でお先真つ暗だ 古閑チヨミ
やり残し今年も師走忙しい 緒方 瑞枝
もう師走年の早さを思い知る 楠井かをる
イエス様ご免ジングルベルに酔う 渡辺 幸士

「俳句」

農機うなり稲束を結う雨催よい 田端 慶子
庭角に一きわ冴えて石路の花 本田さつ子
遠ざかりゆく引鴨に月育ち 楠本 美鶴
数珠玉で遊びし友の今は亡く 古田 幸子
おだやかな秋の日なりし夕灯す 堀田 孝恵
気がかりの事一つ終え冬紅葉 本田 信子
渡り鳥仰ぎ見る間に点となり 高田れい子

■お問い合わせ先 町教育委員会公民館事務局
☎096・234・1111（内線321）

ひとの動き (敬称略)

11月11日(木)～12月10日(金)

birth お誕生おめでとう

住所	氏名	性別	保護者
糸田	松瀬 悠大	男	梨 孝樹
上川	岩永 優月	女	義 大誠
早津	井元 愛輝	男	
船原	吉田 奏羽	女	

marriage ご結婚おめでとう

	住所	氏名
夫	仁田子	藤本 亮祐
妻	熊本市	紫垣 智美
夫	西寒野	芳村 守
妻	八代市	桑原 光代
夫	緑町	本郷 雄大
妻	熊本市	中村 亜理沙
夫	熊本市	大野 和弘
妻	西寒野	大久保 知恵

condolence お悔やみ申し上げます

住所	氏名	年齢	世帯主
岩下	宮邊 圭介	78	道子
下横田	村田 ミコ	97	俊文
西寒野	井芹 純	86	純
麻生原	福田スエ子	87	スエ子
吉田	吉本ユキコ	87	忠則
南三箇	松本ヤス子	85	ミツヨ
麻生原	丸山巳千男	78	妙子
吉田	上村ムツコ	86	国弘
岩下	本山ツエ子	93	ツエ子
東寒野	田上 正美	83	將富
中山	古閑 初代	92	初代
横田	園田ミツエ	97	信哉
横田	伊豆野芳子	87	武
糸田	本郷カズメ	94	廣子
岩下	成松 芳子	81	富人
上府	赤星コユキ	97	富ヒ
	塚本 篤	87	ヒデ子

Data 甲佐町の人口・世帯数

項目	数	増減
男	5,406	4
女	6,132	△10
計	11,538	△6
世帯数	4,179	△1

平成22年11月30日現在

(町史編さんだより)

加藤清正と云えば、熊本城を築いた武将として知られています。甲佐町ともゆかりが深く、緑川に鶴の瀬堰(ぜき)を築造したと伝えられ、清正の功績を讃える岩鼻神社が横田に今も残っています。昨年は遠忌400年に当たり、展覧会やシンポジウムなどが行われました。「せいしよーさん」と親しまれ、県民の関心はまだまだ高いものがあります。清正が、現代においても存在感を持つているのはなぜでしょうか。

加藤清正の治水事業の業績の一つ「鶴ノ瀬堰」



清正の死後、加藤家は弱体化して1632(寛永9)年に滅びますが、緑川などで行った治水の業績は残りました。その後、各地での干拓、治水工事のときには、清正の偉業にあやかうと加藤神社が建立されました。1832(天保3)年、清正の治水事業を

顕彰した『藤公遺業記』という書物を、各地で惣庄屋を務めた鹿子木量平が著し、土木・治水の神様としての清正像が定着したと言えます。明治維新後、近代日本は大陸への膨張政策をとり、日清・日露戦争を戦い、韓国併合を行いました。このような

甲佐の歴史を紡いで

～町史編さんだより(28)～

「加藤清正」像の変遷

町史編集委員 栗谷 昌史 (近代)

理念)の人物像にふさわしい歴史上の人物だったのです。修身歴史、唱歌などで児童に喧伝されました。

第二次世界大戦後、「軍神」としての清正像は消え、代わって、戦後の復興、公共工事による社会資本の整備に伴い、土木・治水の清正像が再び注目されるようになりました。そして、現在、熊本城は、観光資源としての重要性を益々高めています。

清正は時代とともに、その人物像が変遷してきました。歴史上の人物の「人物像」を創るのは後世の人々である、ということに私たちは留意する必要があります。

▼『甲佐町史』編さんに関するお問い合わせ先
町社会教育課町史編集係
☎096・234・3310

編集後記

早いもので、21世紀の最初の10年は幕を閉じ、10年前の世界観は今昔。本格的に、次の時代が躍動し始めた。

コンピュータがつかさどる日常は、生活も仕事もデジタルなしでは立ち回らない時代。アナログなものは影を潜め、これまで人を拘束していた場所と時間の概念もほぼ消滅する流れ。

例えば、電子書籍。蔵書の全てを端末で持ち運べて閲覧できる時代。決められた場所と時間に縛られることなく、いつでもどこでも読むことができる。

世界が変われば、何事もやり方が変わるの世の常。広報紙は、広報紙という形態で時代のニーズに添えられる媒体かという思案も、当然に必要な時勢。

新春を迎えて、新しい1年について考えるとともに、新しい10年についても心をめくらす絶好の機会としたいですね。(一)